

(^_^)v 趣味に生きる(第50回) ~☀~☂~☘~🍄~☀~☂

アウトドアの醍醐味と スローライフのすすめ

「懐かしのスキー旅行記事」Ski bumより

竹村正男

◆はじめに

昨年、高校時代の陸上部OB会の総会が榎原神宮陸上競技場近郊のホテルで開催された。晩秋の飛鳥路は神武天皇陵(初代天皇)を囲み多くの遺跡と共に色鮮やかな野山が古代ロマンを感じさせる風景で懐かしく感じた。総会はオリンピック年に合わせて4年毎に招集されるのが慣わしで当時の顧問の先生、在職中の校長にも出席して頂き、毎回80~100名位集まる会である。最も多く交わされた言葉で体育会系の集まりの合言葉のように「いま、何かやっている?」「まだ走っているヨ」と切り返せる世代、「ようやるワ」の返事が返ってくる世代に分かれるようである。

小生はもともと頭より体を使う方が性に合っているようで趣味の仕事以外の中で垣間見る時間軸では山登りとスキーに費やした時間が最も長い。続いて移動は車なので車への興味で取得した競技者ライセンス、空へのあこがれで日本航空協会ライセンスを取り、自然との付き合いで危険と隣り合わせで過ごしてきたように感じる。今にして思えば、良くも悪くも無事に過ごせた幸運に感謝! 今回の寄稿文は長年にわたり雪との戯れに焦点を当てた「スキーよもやま

話」を過去の世情と照らし合わせ紹介してみたい。

◆はじめてのスキー

最初のスキー体験は高校卒業後の3月の一本の電話から始まった。陸上部の同級生の山市君から「スキーに行かへんか?」のお誘いで、ウェアも用具も無い状態を考慮せず、関西系の軽いノリから「ええで」と考えがまとまらない内に言葉の方が先行していた。彼はスキー経験が有り、ウェアから用具一式は揃っているようで要領は把握していた。宿の予約からスキー場選りなど煩雑なことは全てお任せからのスタートである。もともと旅行は好きな方で休みになると時刻表片手に全国の旅を学割で楽しむフットワークの軽さは自負している。当時はユースホテルに宿泊すると会員証にスタンプが押され、これを全国規模で集め自慢しあうのも楽しみの一つであった。そこで彼の提案で卒業記念として北陸地方でユースホテルの有るスキー場をキーワードに約1週間の行程を計画してくれた(ちなみに、私の方は一週間前には沖縄旅行でコバルトブルーの海を楽しんで帰ってきたばかりで、いきなり南国から雪国への移動となる)。

現在のように高速道路整備はされていないころ

藤田保健衛生大学大学院医療科学専攻先進診断システム探索講座客員教授
京都大学医学部人間健康科学科非常勤講師、岐阜大学医学部病態情報解析医学非常勤講師
一般社団法人健康科学リソースセンター理事長

のスキー場へは国鉄(現在のJR)の夜行列車が当時の移動手段で「早朝にゲレンデに立つ」は、今も昔も変わらないスキーヤーの行動心理である。

世情はアジア地域初の冬季オリンピック(1972年)が札幌で開催された後のことでスキー人口は急増し、スキー場ではリフト待ち時間30分以上は当たり前、若い方は多分信じられないかと思うが職場の大先輩方にお聞きされると理解出来ると思います。また、年末年始の夜行列車は東京で言えば山手線、大阪では環状線に乗るようなもので、スキー板と道具一式の入ったザックを背負い目的地まで立ったままの状態で朝を迎えることになる。

さて3月の北陸地方へは年末の混み合いもなく、深夜の甲高い汽笛を飛ばしながら大阪発-新潟行の夜行急行列車「きたぐに」に揺られ早朝に富山駅に着いた。3月とはいえ駅前には自分の背丈ほど高く積み上げられた雪を初めて見て、雪国に来たとの感覚を持ったのが今も印象に残っている。

スキー行程の初日は富山駅から地鉄(富山地方鉄道)で本宮駅まで約1時間位、立山連峰山麓の極楽坂スキー場で2泊、次に金沢(西金沢)から北鉄(北陸鉄道)で加賀一ノ宮(現在廃駅)まで移動し獅子吼高原スキー場(夏場はハンゲライダーで有名)で2泊、そして福井駅経由で越前大野まで移動しバスで六呂師高原スキー場(現在閉鎖)に2泊と3ヶ所のゲレンデを楽しんだ? これが小生のスキーバムの始まりである。

初日の極楽坂スキー場での出来事はいまだに鮮明によみがえってくる。How to Skiは靴の履き方からで、中学校時からスケートの経験があり氷の上か雪の上かの違いで、滑ることは延長線上にスキーが有るとの間違った意識を持っていた。実際は大きく異なり、友人に借りたスキー用具一式の靴は革製で重い登山靴の底の部分をスキー板の幅に合わせて作られたようなもので長さは190cm。またビンディングは現在のようなステップイン機能はなく、踵部分を固定したワイヤーがトウ部分まで伸びてバネの強さを

長さで調整する、まるで漫画のトムとジェリーに出てくるネズミ取りの仕掛けのようであった。悪戦苦闘の末やっと雪の上に立ったが、どうすることも出来ない状態で自分の意志がスキー板に全く反映されないことを悟った。まず歩くことから始めるが、これが前進不能で状況判断が出来ておらず、斜面に向かい登っているようであった。すかさず「エッジを立てろ」と横から山市君の声、「エッジ?」何ものじゃと考えていると、彼は器用にも自分のスキー板の片足を持ち上げソール(底板)と側面の角に取り付けられている金属部分をストックで指した。小生のスキー知識はこの程度からの始まりで、午前中は終わったような記憶がある。午後はリフトの乗り方から教えてもらったが、結局上手く乗れずスキー板を外し初心者コースの上部まで行った。スキー板を付けてみたが斜面を見た途端、「無理!」と悟り下りのリフト利用が決定された。何と1日目は食堂前のなだらかな斜面を一人で遊ぶ羽目に陥った。スキー場に来る前まで彼は「教えてやるから大丈夫」と言っていたのに本人は何のわび入れる様子もなく、今日は回数券全部使ったと自慢し1日目は終了した(多くの初心スキーヤーが陥る罠である)。

翌日はリフト券回数がなくなり次第に次のスキー場へ移動する段取りで、小生の回数券は殆ど残ったままで、彼の消費マインドをくすぐったようであっけなく使われてしまった。このような光景が3ヶ所のスキー場で繰り返されたことは、この旅行記をお読みの方には容易に想像がつくのではないと思われる。このようにしてスキー経験が小生の脳裏に長期記憶として海馬の奥に深く刻み込まれた。このような出来事が毎年12月から3月まで繰り返され、やがて手続き記憶に置換された結果が全日本スキー連盟(SAJ)認定証である(写真1)。当時のSAJ基礎スキー技術検定は5級から最高位の1級までであり、多くのスキーヤーが最終目標としていた。それ以降は職業の選択支の一つとして表現力スキルが求められる準指導「ジュンシ」・指導員へと進むのが一般的であった。信州乗鞍高原

スキー学校でインストラクターをやっていたころの集合写真である(写真2)。講習を申し込みされた生徒さんには怪我なく楽しんで頂くのがインストラクターの一日ですが(写真3)、小生

にとって講習が終わりリフト終了までの間が最も貴重な時間帯でした。「ジュンシ」を目指すインストラクター集団の講習会が開催され、その時のボスが筒木完一さんである(写真4)。彼は



写真1 全日本スキー連盟の1級合格証(長野県連盟発行)



写真2 1月：乗鞍高原スキー学校の集合写真(著者：前列から2列目、右より3人目)



写真3 2月：スキー講習後、生徒さんたちと
(著者真ん中)



写真4 スキー学校随一の論客指導員：筒木完一さん
「やまに荘」のオーナー



写真5 信州乗鞍高原 民宿やまに荘

小生より3歳年上で頭が上がらない存在であるが、スキー技術の論客でもあり「ウエーデルンは階段を下りるように」が口癖でした。地元で「やまに荘(写真5)」と云う温泉民宿を営んでいるが、いつもお婆ちゃんが「竹村さんが来たから」と打ってくる蕎麦は絶品！蕎麦は人それぞれにこだわりの評価をお持ちでしょうが、40年以上の蕎麦人生の中でこれよりおいしい蕎麦に出会ったことが未だにない。ボスといつもこの話をすると「昔から乗鞍高原は寒くて蕎麦しか採れず、如何に美味しく食するかを母親は工夫してくれた、小学校時は嫌で仕方なかった」と日本酒片手に昔話をする穏やかなまな

ざしは印象的であった(小さい宿の露天風呂で一杯飲めます)。

◆ギャップのメッカ

1998年、日本で2度目となる冬季オリンピック長野大会が決定され、長野県全域の宿で食事が良くなったのもこの時期である。Downhill(DH)会場となったのが白馬山麓の八方尾根スキー場のリーゼンスラロームコースで第一ケルンから兎平付近の様子を写したものである(写真6)。

大会以前は日本有数のコブコブ(ギャップ)コースで、バーン一面に茸のように生えている表現がぴったりの斜面である。一つのコブの頂点と底辺で大人が一人隠れる位のコブがシーズン



写真6 3月：白馬山麓八方尾根スキー場：
リーゼンスラロームコース



写真7 12月年末：志賀高原横手山ゲレンデ付近
(著者真ん中。右となりの大きな体の松波英寿先生)

半ばに次々と育ち、今や名前すら忘れ去られたベーレンテック実践の場にもなった。このコースは毎年けが人が多数出るのも名物で、骨折したことを酒の肴に自慢する輩も出る始末である。最近のように雪上車でコブを潰し平にするのが当たりのようなゲレンデは如何なものかと感じるのは古い人種でしょうか？

◆日本最大のスキー場

長野オリンピックで Giant Slalom (GS) の会場が志賀高原である。写真7は最も標高の高い横手山ゲレンデでの集合写真で、中央のやや体格の良い青年(?)は小生の古い友人の外科医(松波英寿先生)で、これから17年後に彼は世界で最初に血友病患者(第VIII欠損)の生体部分移植を成功させる場面を作ることになるとは夢にも思っていなかつたらうと思う。現在は家業の病院経営を引き継いでいるが研究マインドは今も消えることなく、新しく松波リサーチパーク(医学研究所)を設立し、研究活動を通して社会貢献を行っている。よく会食を共にするが「竹ちゃん、昔はよかったな」と嘆くのが口癖で日常の診療と経営に奔走し、小生の知人で最もスローライフが必要と思うひとりである。

◆スキーは冬のスポーツ？

毎年、冬が近くなるとメーカーの新作情報がメディアを通じて人々にシーズンの幕開けを告げる。スキーは雪を媒体に楽しむスポーツの一つと考えれば何ら冬以外でも雪さえ有れば何処でも楽しむことが出来るのでは？



写真8 5月：万座・渋峠スキー場
(長野・群馬県境付近：著者(左下)と山市君(上))

この結果、小生のスキー人生は大きく変わり、スキー板に乗っている時期は一年中オールシーズンで有ることが判明した。一般的なシーズンは12月から3月一杯であるが、小生の場合4～5月は志賀高原の横手山から渋峠あたりが半袖で滑ることが出来る(写真8)。また、6月～8月初旬は乗鞍岳山頂の大雪渓はジーンズ姿で滑ることが可能である(格好や経歴不要)(写真9)。

また、もう少し体力が必要であるが山岳スキーとして名高い立山連峰の剣岳と別山のコルから日本最大級の大雪渓である剣沢を滑ることが出来る。さらに剣岳の対面の浄土山から剣・大汝山・雄山の立山連峰を眺めながらの滑走は格別で5月でも新雪を楽しむことが出来る(吹雪に注意)(写真10)。ただこれらの大雪渓はスキーを担いでの山登りの覚悟が必要で、地獄谷(標



写真9 7月：乗鞍岳山頂付近の大雪渓合宿仲間と
(著者：右4人目)



写真10 5月：剣沢大雪渓滑降にむかう登山
(著者：左)

高2,300m)からさらに3時間ほどの時間と体力が必要である(是非、お試しあれ)。

今まで無名なスキー場からメジャーなスキー場まで100以上を巡り、数え切れない数のゲレンデコースで雪と関わり合って印象的なシチュエーションから回想してみた。昔のスキー場には地域性を感じさせる何かがあったが、時間と共にいつの間にか特色の薄れた何処でも誰もが同じ楽しみ方を味わえるコンビニエンス化されたスキー場へと変革されて来ている。また産業の変革は様々な分野へ普及し、新しいマテリアルと共に登場しては波を誘発し、衰退している。スキー用品の革新が数年ごとにモデルチェンジが行われ、スキー技術指導のバイブルでもあるスキー教程(全日本スキー連盟編集)すら変わることになる。様々なリスクを抱えたまま、変化に対応して行かなければならない現在社会、少し時間をゆっくりと流せられないでしょうか？

よく趣味は何ですかと聞かれることがあり、ひと頃はこれとこれで実際はこんなことで楽しんでいますと説明するのに一苦労してきた。今日の情報化の時代、検索すれば瞬時に知識は到達することが可能ですが、スローライフは体験することが全ての記述より優先します。息子と始めたルアーフィッシングは20年程になるが、何十万回ものキャストングの中で時間が止まる瞬間の感覚は言葉では表すことが出来ない醍醐味がある。最近は何れなくても時間を見つけては琵琶湖まで足を伸ばし、カヌーで四季折々の時間の流れを楽しんでいる。スローライフは人それぞれの人生観を趣味と言う媒体を通じて表現しているものと考えている。

「未覚池塘春草夢」少しくらい、それぞれの価値観や世界観と云う夢の中に誘ってみては如何でしょうか。